中野実『大学史編纂と大学アーカイヴズ』
（財団法人野間教育研究所、二〇〇三年）

中野実『近代日本大学制度の成立』
（吉川弘文館、二〇〇三年）

中野実『反大学論と大学史研究 ―中野実の足跡―』
（東信堂、二〇〇五年）

大島　宏（立教学院史資料センター学術調査員）

二〇〇二年三月末、立教学院史資料センターの研究員でもあり、立教学院百二十五年史の編纂にも携わったことのある中野実さん（東京大学助教授、元・立教学院史編纂室常勤嘱託）が逝去された。享年五〇歳。日本では数少ない大学アーキヴィストであり、すぐれた大学史研究者であった。

中野さんは、数多くの論考を、さまざまな媒体に残している。これらの論考が、生前に氏と交流のあった人々（中野実研究会）によって、三冊にまとめられた。中野さんのあゆみをふまえつつ、ここに紹介したい。

◇◇◇◇

中野さんは、一九八一年に東京大学百年史編集室の専任助手に就任して以来、東京大学百年史や立教学院百二十五年史などの大学史編纂の中心的な担い手であった。また、東京大学百年史編纂事業の終了にともない、八七年に設置された東京大学史史料室の唯一の専任室員（助手）として、大学史資料の収集や整理・保存に携わってきた。東京大学百年史はそれまでの大学沿革史の水準をはるかに越えるものであったし、東京大学史史料室は大学アーカイヴズに関する本格的な検討を経て設置されたはじめての部署であった。その意味で、中野さんは、本格的な大学史編纂と大学アーカイヴズに関するパイオニア的存在であり、後に続く機関にとっては生き字引のような存在であったといっても過言ではない。それゆえ、中野さんの経験と知識は、国公私立を問わず多くの大学・学校から期待された。そして、中野さんは、その期待に応え、多くの講演や執筆活動を行ったのである。これらをまとめたものが、『大学史編纂と大学アーカイヴズ』である。

本書は第一部「大学史編纂」と第二部「大学アーカイヴズと大学史資料」から構成されており、その内容は大学沿革史編纂の実務や課題、大学沿革史の批評、大学アーカイヴズ論やその実務、大学史に関する資料論（＝大学アーカイヴズの資料論）など多岐に及んでいる。なお、巻末には西山伸（京都大学）、桑尾光太郎（東京経済大学）、松崎彰（中央大学）、鈴木秀幸（明治大学）の各氏による「解説」が付されている。同書に収められた論考

の概要や意義については、この「解説」を参照されたい。

◇◇◇◇

『大学史編纂と大学アーカイヴズ』に収められた論考は、いわば中野さんの本務から生み出されたものであった。この本務を支えたものが、中野さんが志半ばにして、自らの死によって断念せざるを得なかった大学史の研究であっただろうことは想像に難くない。

中野さんは、立教大学文学部心理学科を七四年に卒業した。大学史研究を志し、七五年に立教大学大学院文学研究科教育学専攻に入学。寺崎昌男氏（現・立教学院本部調査役、東京大学・桜美林大学名誉教授）に師事することになる。修士論文のテーマは「大正期における大学令制定過程の研究」。以後、二十数年にわたって、大学史に関する実証的な研究と史料の発掘や復刻・解説の仕事を精力的に行ってきた。これら数多くの大学史に関する研究を「中野氏が構想していたであろう近代日本大学制度の成立史の全体像を構成」（「はしがき」）すべく編み直したものが『近代日本大学制度の成立』である。

本書は、第一部「帝国大学の成立」と第二部「一九一〇年代における大学制度改革論議と大学令」から構成されている。中野さんは、一九九〇年ころから、政治・経済制度などと緊密に関連した国家体制の全体的な構造のなかで帝国大学の成立（一八八七年）をとらえるべく研究を進めており、博士論文としてまとめ上げようとしていた。第一部は、この「帝国大学体制」の成立史に関する論文によって編まれている。しかも、その構成は中野さんの残した博士論文の構成案にもとづいており、「幻の博士論文の下敷き」（「はしがき」）とでもいうべき性格のものである。第二部は、中野さんが三〇歳前後に発表した一九一〇年代における大学制度改革に関する論文によって構成されている。近代化の徹底をめざして高等教育制度が整備されていく時期の改革動向に焦点をあて、高等教育をめぐる論点が大学令へと集約されていく過程を明らかにしている。これらの論文の意義については、荒井明夫（大東文化大学）、湯川次義（早稲田大学）両氏による「解説」を参照されたい。

◇◇◇◇

私事になるが、かつて立教大学における大学「紛争」と法学部社会人入試の関係についての駄文を書いたことがある。その過程で中野さんに意見を求めたことがあった。九八年の冬のことだったと思う。その時、中野さんから、「紛争」（もめごと）というのは「当局」の認識であって、学生たちにとっては「闘争」（たたかい）であったのだから、「紛争」という言葉を安易に使ってもらっては困る、という趣旨のことを強く言われた。今でも鮮明に覚えている。ただ、なぜそのようなことを言うのか私にはわからなかった。中野さんに問うこともなかった。この発言の根底に中野さん自身の経験があったというこ

とを知ったのは、中野さんが逝去された後のこと、残された一九七〇年代の文章に触れた時であった。

中野さんが立教大学に入学したのは一九七〇年。立教大学でフランス文学科の人事に対する学生の異議申し立から全学的な「紛争」状況へと展開したのが六九年のことであったから、まだ「紛争」の余韻が残るころであった。残された文章によれば、中野さんは、学部学生時代には、立教大学に自主講座を設置するための運動を展開していたらしい。また、宇井純氏（当時東京大学助手、のち沖縄大学教授）らによる公開自主講座「大学論」や五十嵐良雄氏（当時横浜国立大学非常勤講師、のち相模女子大学教授）を中心とする現代教育研究所の活動などに積極的に（中心的に）に関わっていたようである。さらに、そうした活動の一環として、さまざまなメディアに「反大学論」や教育批判論を展開し、単位制度やカリキュラム編成など教育のなかにある権力関係を批判し続けてきた人物でもあったのだ。これら七〇年代の「反大学論」や教育批判論を編み直すとともに、中野さんの思想表現のひとつのスタイルであった「かわら版」に収められた文章と交流のあった人物による回想・追悼文をまとめたものが、『反大学論と大学史研究―中野実の足跡―』である。

◇◇◇◇

中野さんにとっての「反大学論」と大学史研究は、自らの、そして大衆のなかにある「幻想としての大学」にアプローチするふたつの方法だったのではないだろうか。

「立教大学自主講座設置運動の軌跡」（七三年）という文章に次のような一節がある（『反大学論と大学史研究』一〇八頁～一〇九頁）。

「大学とは、学問の府とか真理を探究するとか言われているが―私もそうと信じて大学まできてしまったのだが―大学の本質は、どうやらそんなものではなく、中身よりも形式、何単位か修得し、卒業のレッテルがもらえる（取る）ところのようであることがわかってきた。」

また、東大百年史編集室の助手であった八四年に記した「新しい世界への問いかけ」という文章には、中野さんが大学に入学するにあたっての思いが次のように記されている（『反大学論と大学史研究』二二〇頁～二二一頁）。

「大学に対してどのようなイメージを持っていただろうか。〔中略〕大学にいけば自由な時間に勉強ができる。大学は学生に対して自由に専攻科目を選択させ、講義の出欠調べなどはもちろんなく学生の自主的判断にゆだねられている、といった大学像であった。〔中略〕そして昭和四五年大学入学。徐々にではあるが確実に、当然の如く前述の大学像は解体された。」

中野さんは、ひとびとの願いや希望を実現する場として、大学をとらえていた。しかし、中野さん自身の願い

や希望としての大学像は、その大学によって「解体」させられたのである。その意味で、中野さんにとって「反大学論」は「大学を人間化することで人間的解放をめざす」（『反大学論と大学史研究』一〇三頁）、いいかえれば願いや希望である「幻想としての大学」を現実のものとするための営みだったのだろう。その一方で、「幻想としての大学」を「生み出し、支えた意識を、もう一度意識化するところから、深く日本における大学の成立如何を問う」（『反大学論と大学史研究』一〇四頁）ことの必要性も感じていた。それが中野さんにとっての大学史研究であったのではないだろうか。

中野さんのはじめての単著『東京大学物語――君がまだ若かったころ――』（吉川弘文館、九九年）の冒頭には、当時の東京大学総長・蓮實重彦氏の次のような言葉が引用されている。

「東京大学の全貌を提示するのがやっかいなのは、こうした規模〔中略〕の大きさによるものではありません。問題は、東大と略称されているこの大学をめぐる社会的なイメージの、ほとんど『神話的』とも呼びうる過剰な流通ぶりであります。〔中略〕あたかもその『神話性』が東京大学の定義であるかのように、事態が進行してしまうのであります」

この「神話性」を問い直すことこそが、この著書でめざされたものであった。しかし、その意識は、大学入学以後、中野さんの深いところに常に存在していた問題意識だったのだろう。

◇◇◇◇

中野さんは、大学に裏切られたという思いをどこかで常に抱いていたのだと思う。しかし、その一方では、それでもなお大学を愛し、大学に期待していたのだと思う。その意味で、性格の異なるように見えるこの三冊は、中野さんの大学への愛憎の発露であり、自分自身の問い直しの過程であり、「大学の人間化」を目指した「反大学論」的な営為の成果ということができるだろう。

しかし、それを中野さんの個人的な意識や営為のレベルにとどめてはいけない。中野さんが抱えていた問題意識は、新自由主義的な改革が進む現在にあって、いまでもアクチュアルな意義を有しているのだから。

読み手であるわたしたちが試される三冊である。